

談話における自称詞のいわゆる「無助詞」現象

一言わなくてもわかる時に言う「わたし」の機能一

荻宿 紀子

1. はじめに

本稿では、談話において自称詞が助詞を伴わずにハダカで出現する用例を取りあげ、その機能を明らかにする。話し言葉では「わたし、帰るね」のように、名詞が助詞を伴わずに出現するいわゆる「無助詞」現象がしばしばみられる。これまでの「無助詞」研究では、「わたし」と「わたしは」、「わたしが」との比較が多く行われてきたが、そもそも主体を示さなくても話し手自身のことを話しているとき、なぜあえて「わたし」と言うのかという観点から、自称詞の「無助詞」現象を再考し、「わたし」が談話標識として用いられていることを考察する。

2. 先行研究と本稿の立場

「無助詞」現象については、様々な先行研究でその出現条件や意味・機能が論じられてきた。「無助詞」には、単なる助詞の省略と考えられる用例、助詞は復元不可能であり助詞がないのが無標と考えられる用例がある。「無助詞」現象の中でも助詞復元不可能な表現というのは、「無助詞」特有の意味や機能があるということであり、その出現条件と意味・機能を明らかにすることは、談話分析の面からも文法論の面からも必要性がある。

尾上(1996)では、主語にハもガも使

えない文の類型のCタイプとして、その内容が話し手のこと、聞き手のことに決まっている文を挙げ、「言わずとも、主語は話し手または聞き手に決まっており、主語を言っても情報価値はなく、ただつけているだけの場合。(主語は、ある意味では、文の外にある。)」と述べている。話し手については、「話し手の感情、希望、意向、意志、事情説明などにおける一人称詞」が挙げられ、そのような一人称詞を対比や排他の意味を含ませずに表現する場合は「ハもガも使えない文」となるということが述べられている。

このことから、話し手が主語の文では「無助詞」が無標であるということはわかるが、そもそも助詞の有無に関わらず、話し手自身のことを話しているとき、主体を顕在化させる必要があるのだろうか。日本語では必ずしも主語を表出する必要はない。主体がわかるのであれば、顕在化させずともよいはずである。

しかし、実際の談話資料を見てみると、以下のような「言わなくても」主体が話し手であると「わかる」ときに「わたし」と言う例が散見されるのである。

[1] F09 もう、でも、ほんとにわたしΦ
あれ名言だと思うもん、やっぱ「人名1
あだ名」の。 [BTS116]¹⁾

[2] 11A [F20] あたしーのほうがね、あけ
なきやいけないのに。

11H [F20] <笑いながら>あたし^④韓国語やろうかな。【女性:雑6173-6174】

[1]は思考、[2]は意志を表す述語であり、その主体は話し手自身である。主体がわかるにも関わらず「わたし」「あたし」と述べているが、なくてもよいわけではなく、むしろある方が自然な表現である。

[1]は「わたし」があると「これはあくまでわたし個人の意思である」ということを聞き手にわかってほしいという話し手の発話態度が表現され、「わたし」がない場合とは異なる。[2]の用例部分の前は11Aが韓国語の先生に本を借りていてその本を返したら、先生がドーナツをくれたという話をしている。韓国語の先生がやさしいという話を聞いていた11Hが言ったのが[2]の用例部分の発話である。「やろうかな」という述語部分だけでも主体が話し手だとわかるが、「あたし」はやはりあった方が自然である。「あたし」は「なんか」や「ていうか」のような話し始める際のきっかけの表現となつていふと考えられる。

尾上(1996)では「情報価値はなく、ただつけているだけ」と述べられているが、構文上の価値はなくとも、わかっていることをわざわざ言うということは何らかの意味・機能があるということである。[1][2]のようなハダカの自称詞には、主体の明示という構文上の機能のほかに、談話における機能があると考えてもよいのではないだろうか²⁾。

先行研究では自称詞の「無助詞」現象を考える際、「わたし」と「わたしは」、「わたしが」との比較に終始していたが、「無助詞」のみが有する領域については助詞がある場合との比較をしてもその意味・

機能が明らかにできない。本稿では、そもそも言わなくても主体が話し手だとわかる時になぜ「わたし」と言うのかという観点から、自称詞のいわゆる「無助詞」現象を考察したい。

3. 調査にあたって

3.1 調査資料

- I 現代日本語研究会(1997)『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- II 現代日本語研究会(2002)『男性のことば・職場編』ひつじ書房
- III 宇佐美まゆみ監修(2007)『BTSによる多言語話し言葉コーパス—日本語会話(1)(2007年版)』東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプロジェクト「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」

Iは11421レコード中、9975レコードを調査対象とした。内訳は雑談5975、打合せ1841、会議1143、相談458、その他仕事358レコードである。IIは11099レコード中、6475レコードを調査対象とした。内訳は雑談2839、打合せ1850、会議333、相談612、応対352、その他仕事488レコードである。

I、IIの電話、挨拶、IIの講義の場面は対話ではないため、対象外とした。IIは最長居住地が関東以外の話者のレコードも対象外とした。Iは用例をあげるにあたり、発話の前に話者番号を示し、続けて「話者性別:年代」も示した。用例末尾の【】内に出典、場面、発話番号を示した。場面は雑談を雑、打合さを打、会議を会、相談を相、応対を応、その他仕事を他と示す³⁾。

IIIについては「1親しい同性友人同士(男女)の雑談」を調査資料とする。発話

者の属性は、日本語母語話者、10代後半から20代中盤、非常に親しい同性・同学年の大学(院)生同士である。19会話、文字化された総発話文数10651のうち、関西方言が多く出てくる4会話を除く15会話を調査した。Ⅲは用例をあげるにあたり発話の前に話者を示す。Fが女性話者、Mが男性話者である。用例末尾の【】内に出典とライン番号を示す。

I～Ⅲいずれの資料においても用例となる語を含む発話に聞き取り不明の箇所がある場合は分析の都合上対象外とした。

3.2 調査対象語

述語の主体として出現している自称詞を調査対象語とした。自称詞の定義は鈴木(1982)の「発話の中で話者が自分自身を指示したり、自分自身に言及するために用いる語」に従っている⁴⁾。述語との関わりから自称詞を分析するために、自称詞と述語とが資料上に表れているものを用例として採集した。

本調査は談話での自称詞の機能を明らかにすることを目的としており、発話単位で考察する必要があると考え、連体修飾部分、独立性の低い従属節部分に現れた自称詞は採集しなかった。また、複数形の自称詞、間投助詞「ね」「さ」「よ」がついた自称詞、倒置文中、引用中の自称詞はすべて対象外とした。

3.3 手順

まず、自称詞が出現した発話について、自称詞を削除しても述語で主体が話し手であるとわかるか否かで分類した。述語で主体がわかると判断したのは「思う」「欲しい」「～たい」「好き」などの用例で

ある。述語だけではわからない用例は、前にある発話で主体がわかるか否かでさらに分類した。述語だけで主体がわからない場合も、談話では述語の主体は話し手自身であることが多い。しかし、述語だけでは主体不明の場合、前の発話で話し手以外の人物の話をしていると、次の発話での主体が話し手であっても明示しなければ理解できないため、主体が話し手であることを明示する必要がある。

表1 自称詞を削除した場合の主体判別

	自称詞 Φ	自称詞 +が	自称詞 +は	総計
①自称詞がなければ主体不明	80	37	47	164
②自称詞がなくても主体判明	115		39	154
総計	195	37	86	318

表1の①は自称詞がなければ主体が話し手であることがわからないため、主体明示のために自称詞が用いられている例である。「自称詞+が」の用例はすべて①に分類された。これは「が」がもともと主体を明示するために使われているため、「が」が使われる用例というのはもともと主体がわからないか、主体を示さなければ一人に限定できない用例であるからだと考えられる。

[3] 04A [F50] あー、わか、分かんないで
すよ、[名字]、わたしがなにをなんの
ためにここにいるのか★よく分かん
ない。04J [F50] →司会よ、司会進行←す
べて。＜複数同時＞04G [F50] 次は一。
04G 次は一 [名字] 先生ですけど。04A
あ、そういうことゆうのね。04A じゃ
あ、わたし[が]この [社名]の話はゆうの
ね。04C [M60] うん、うん。【女性:会
1398-1404】

[3]は誰が言うのかを確認する発話であるため、「わたしが」という表現は必須

であると考えられる。

一方、表1の②は自称詞を言わなくても話し手が主体であるともわかるにもかかわらず、自称詞を用いている用例である。表1②の用例については、構文上はなくてもよいものをあえて顕在化させている用例となるので、これらの用例の自称詞が談話においてどのような機能を有しているかを考察することとした。

そこで表1②について、自称詞が現れた位置が発話⁹⁾の奥であるか、発話の頭であるかで分類した。発話の奥と分類したのは、自称詞の前に実質的な意味を持つ語が出てきた用例である。発話の頭と分類したのは、自称詞の前に実質的な意味を持つ語がない用例である。自称詞の前にフィラーや接続詞が出現した用例も含まれている。発話の出現位置で分類したのは、談話展開に関わりがあるかどうかに関係するからである。発話の頭に出現する用例については、談話展開に関わりがあると考えられるため、〈話題継続〉〈話題転換〉〈話し始め〉の3つに分類した。その分類結果が表2である。

表2 発話内での出現位置と自称詞の機能

分類	自称詞Φ	自称詞は	総計
①奥	28	13	41
②頭/話題継続	39	26	65
③頭/話題転換	37		37
④頭/話し始め	11		11
総計	115	39	154

〈話題継続〉は前の発話の話から話題の転換がない用例である。具体的には当該発話の前の発話内容を指す指示語が使われていたり、述語が前の発話の述語と同じか、同類の意味を表すものを使っていたりする用例を分類した。〈話題転換〉は前の発話と関連はあるものの新しい話題が始

まっている用例である。〈話題転換〉と〈話題継続〉は連続的に排他的に分けるのは難しいが、〈話題継続〉についてはできるだけ形式的な根拠に基づいて分類した。

〈話し始め〉に分類したのは、当該発話の前に「間」がある用例と、前の発話と全く関係ない話が始まっている用例である。ただし、「間」があっても話題が継続している場合には〈話題継続〉に分類した。

表2を見ると、①②は「自称詞Φ」「自称詞+は」が両方出現する領域であり、③④は「自称詞Φ」のみが出現する領域であることがわかる。①②については、「自称詞+は」「自称詞なし」との比較から「自称詞Φ」が「話し手の発話態度」を示していることを考察する。②は発話の頭に自称詞が出現した用例で、談話展開としては〈話題継続〉の機能があるが、「ハダカ」の自称詞のみが持つ機能を考えると「話し手の発話態度」を表しているといえる。③④については「自称詞」特有の領域であるため、「自称詞+助詞」との比較は行わず、「自称詞Φ」が談話展開の機能があることを明らかにする。

4. 用例と考察

4.1 「自称詞Φ」「自称詞+は」が両方出現する領域(表2①②)

4.1.1 対比を表す「自称詞+は」

[4] 01C [男30] おまえ、絶対に誤解して
るよ。01A [女20] そう↑01C 絶対に。

01A や、いやあ、でもね、でも、違う違う違う、だから、そっち、そっち方向の矢は誤解してるかもしれないけれど、
[名前] ちゃんから出てる矢はね、わたしは絶対にね、間違っていないと思う。

【女性:雑287-290】(表2①)

[5] **M12**/沈黙5秒/でも、「**M11**あだ名」は、僕に勝ってたよ。**M11**何が？。

M12いろいろ。**M12**僕**は**も、僕は必ず勝ってるとはとても思ってた。**【BTS723-726】**(表2②)

分類①②の「は」の用例は全て対比の意味を表す用例であった。②については<話題継続>の機能もあるが、対比の意味を含意する「は」の用例であった。自称詞が指示する話し手は発話の場に存在するため、他の選択肢を想起しやすく、「は」を使うと対比の意味になりやすいためだと考えられる。[4] [5]ともに聞き手との対比を表している。

4.1.2 事実の描写において発話態度を表す「自称詞Φ」

4.1.2に分類したのは、事実の描写において自称詞Φが「聞き手に自分の発話内容をもっとわかってほしい」という発話態度を表す例である。

[6] <F11が新製品好きという話で>

F12好きでしょ？。**F11**すごい好き。[感情を前面に出した言い方] **F12**なんかさ(うん)、みんなが持ってないものをもってるのね。[この間、F11は笑っている] **F12**ほんと、そ、それ、あたしΦ。よー、よく見抜いたっしょー？<笑いながら>。**【BTS234-237】**(表2①)

[6]はF12がF11のことをよく見抜いているという話で、この場にはF12とF11の二人しかおらず、他の人物でF11のことをよく見抜いている人物は想定できない。「あたしは」のように「は」を使うと対比的な意味が含意されるため、「は」は使わずにハダカで表していると考えられる。また、主体が話し手であるということは述語部分からわかるため、対比の意

味を回避したいだけであれば、「あたし」をそもそも使わないという方法もある。しかし、[6]はあえて「あたしΦ」で主体を示すことによって、「あたしが見抜いた」ということを注目させており、「あたしΦ」が使われている方が「よく見抜いた」ということを聞き手にわかってほしい、共感してほしいという話し手の発話態度が表されていると考えられる。

[7] <M04の好みのタイプの話で>

M04言ってねーよ、んなこと<笑いながら>。**M03**えー、いや、だって、そうだって言ってたよ。**M04**おれΦ、どんなに酔っ払っても、それは言っていないことは覚えてる。**【BTS95-97】**(表2②)

[7]も[6]と同様の例である。M04は用例部分の前から「言ってねーよ」と述べており、自称詞Φには「それは言っていない」ことを聞き手にわかってほしいという話し手の発話態度が表されている。

4.1.3 個人の意思を述べる場合に発話態度を表す「自称詞Φ」

4.1.3に分類したのは、個人の意思を述べる場合に自称詞Φが「聞き手に自分の意思であることをわかってほしい」という発話態度を表す例である。

[8] **05A** [女40] ほんとに、なんかもう贅沢な、仕事のしかただとあたしΦ思うよね、彼らのやってんのって。

【女性:雑2106】(表2①)

[8]は前掲[1]と同様の例である。用例の前は<無駄な動きが異常に多い>話をしている。05Aは対比を意識せずに自分の意見を表明するために、「あたしは」ではなく「あたし」を使っていると考えられる。ただし、対比の意味を回避したいだけであれば、そもそも「あたし」を使わ

なくてよいはずである。しかし、あえて「あたし」を使い「これはあくまでわたしの個人の意思である」ということを聞き手にわかってほしいという話し手の発話態度を示していると考えられる。

[9] **M12**「**M11** あだ名」、なんか、あれだよ、でも一、印象としてはやっぱり一、あの一、なんだろう一、育ちがいいという印象は、なんに、い、教育がすごくよかったのかなって。**M11** おれはね一、でも、あんまりそういう風には見られ、見て欲しくないね。**M12** あ一一、でもさ一、おれΦ、お、あの一ご両親が一、ちゃんとしてる人なんだなっていう風におもい、思われるっていうのは、すごくいいこと、だと思うけどなー。【BTS597-599】(表2②)

[9]は[8]と同様の発話態度を表す用例である。**M12**は用例部分を含む発話で育ちがいいという印象が悪いものではないと弁明している。「おれは」と述べると、**M11**との意見の対立をはっきりさせてしまうため、「は」を使うことは回避したと考えられる。だが、「あくまでおれ個人の意思」ということを聞き手にわかってほしいという発話態度を示すために「おれΦ」とハダカの自称詞を用いている。

4.1.4 まとめ

表2①②の「自称詞Φ」の機能については、「話し手の発話態度」という観点から分類を行った。4.1.2に分類したのは話し手が事実を述べている用例である。4.1.3に分類したのは述語が「思う」等で話し手が意思を表明している用例である。

表2①②に関しては、「自称詞+は」の例もあり、ハダカの自称詞のみの領域ではない。他の表現と共有している領域で

は、やはり「は」などとの比較において、意味の違いが生じている。助詞を使うと生じる対比の意味を回避するためにハダカの自称詞が使われていると考えられる。しかし、「対比」を表さないことだけが目的であれば、主体を表すこと自体をしなくてもよいはずだが、あえて表現している。このような場合は話し手の発話態度を表す機能があると考えられる。

事実の描写においては、主体がわかるのにあえて主体を示すことで、その発話内容の行為を実行したのは話し手であるということを改めて示し、事実を述べる発話内容を聞き手に訴えかけ、わかってほしいと感じている話し手の発話態度が表されているのである。

個人の意思を述べる場合には、「これはあくまでわたし個人の意思である」ということを聞き手にわかってほしいという話し手の発話態度が表されている。

4.2 「自称詞Φ」のみ出現する領域

4.2.1 話題転換の「自称詞Φ」(表2③)

③は出現位置が発話の頭で、談話展開に関係があり、ハダカの自称詞のみが持つ領域である。他の助詞との比較はせず「談話展開」の観点からみていく⁶⁾。

[10] <学校の音楽係の話で>

F10 うちなんかね、パートリーダーっていなかった?。**F10** パートごとに一、何かアルトパートの一、リーダー、ソプラノのリーダーみたいな。**F10** なんか、それがあって一、その人たちが仕切ってたよ。**F09** ふーん。**F09** あれはでも面白かったなー。**F10** あれねー。

F10 私Φでもね、高校2年のときに学級委員させられて一、<笑い>-略-

【BTS488-494】

[11] <自動車工場の話で>

M15<あ>{>}そこの、娘さんがバイト先一緒だからさ。**M16**へー、あ(うん)、そうなんだ。**M15**うん。

M16ぼく^④**SUZUKI**の店、なかなかないからさ、いつも「地名2」まで行っただよね。【BTS134-137】

[10]は用例の発話の前からF09が学校の音楽係の話をしており、F10も音楽係と関連のあるパートリーダーの話を始めているが、用例の発話で学校の係と関連はあるものの音楽係とは違う学級委員の話に話題を変えている。その際に、「私」が使われている。

[11]では、自動車工場の話をしている中で、M15が「その娘さん」の話をしているが、その後M16が自動車と関連はあるものの「その娘さん」とは関連のない**SUZUKI**の店に話題を転換している。その際に「ぼく」が使われている。

[10]は、「でもね、わたし～」となってもよいところだが、接続詞の「でもね」よりも前に自称詞が出てきている。[11]も「**SUZUKI**の店、なかなかないからさ、ぼく～」となってもよいところだが、「から節」よりも自称詞が前に出てきている。このことからハダカの自称詞は単に主題を示すだけではなく、話題を転換するきっかけの言葉として用いられていることがわかる。

[12] <F05は水曜日でも休めないと言うが、F06は休んだ方がよいと言ってゐる> **F06**あきらめた方がいいよ。 **F05**やー、そうになると私一、どんどん、どんどん、なまけ草になる。**F06**えらいねー。**F06**私^④、どよ、今週っていうか、この

前の土曜から日曜にかけて??(うん)、なか、やっど、ちょっと、ほっとして(うん)、あーの一、すごい寝た。[「すごい」を強調して] 【BTS409-412】

[12]は話し手が話題を変えたいと考えているが、発話内容が定まらないときにとりあえず話し始める例である。[12]は「なまけ草になる」とF05にとって良くない方向に話が進んでいる。自称詞のあとの発話が「どよ、」と言い淀んでいることから、F06は話題をとにかくかえるために、内容がまだまとまらないうちに話し始めていることがわかる。

フィラーを「間をつなぐもの」と考えると、[12]のように、内容がまだまとまらないうちに使われたハダカの自称詞はフィラーのような機能も有していると考えられる。しかし、フィラーと全く同じではなく、ハダカの自称詞の方がフィラーよりも確実に発話順番をとることができると考えられる。「ええ」、「うーん」などと言う場合には、その間に相手が話を始めてしまうこともあるが、「私」と言うとも明らかにその話し手が何か内容のあることを話し始めようとしていることがわかるためである。話題を変えるために発話順番をとりたが、まだ内容がまとまらないときにはハダカの自称詞が間をつなぐためにも使われている。

4.2.2 話し始めの「自称詞^④」(表2④)

④も出現位置が発話の頭で、談話展開に関係があり、ハダカの自称詞のみが有する領域である。他の助詞との比較はせず「談話展開」の観点からみていく。

[13] **19B**[女30]→あっ、はい、かしこまりまーしたー。←<間2秒>

19A[女40] あたし^④きのう[名字]さ

んに夜電話しようと思ったんだけど
ちょっと電話、あの一、きのう出来な
かったの。【女性:打11376-11377】

[14] 13A [女20] だって、話合うじゃん、
[あだ名]って。13C [女20] やー、話だ
けは合うけどー、★やっぱり[名字]く
ん。13A→あだし④おみそ汁買ってく
るー。←【女性:雑7878-7880】

[15] <子どもの分のごはんを誰が作る
かという話をしている>

09F [男50] でも一立派ですねー、表
彰(ひょーしょー)しないとかだめだ、こ
れは。<間>09A [女30] あー、あだし
④、お花一、きのう生けんの忘れてた。

【女性:雑4296-4297】

[13]は、前に「間」がありその後に新た
な話題で話を始めている用例⁷⁾、[14]は前
の発話と全く関係ない話を始めている用
例、[15]は話し手がその場で気づいたこ
とを話し始める用例である。[13]のハダ
カの自称詞は述語が「思う」であるため、
明示しなくても主体は話し手に限られる
が、あえて「あだし」と言っているのは、
ハダカの自称詞が新たな話題をはじめる
きっかけの言葉として「なんか」や「てい
うか」のように使われているからである。

4.2.3 分類③④のまとめ

表2から、「③自称詞の出現位置が発
話の頭、機能が話題転換」、「④自称詞の
出現位置が発話の頭、機能が話し始め」
の用例は、自称詞がハダカの場合にのみ
有する機能であることがわかる。【女性】
【男性】は必ずしも話し始めるところか
ら書き起こしているわけではないため、
話し始めの用例は少ない。書き起こして
いる部分の中で、一度「間」があいて話し
始めるという状態が含まれなければ話し

し始めの用例は資料にないことになる。
また【BTS】は話し始めから資料がはじ
まっているが、録音の場を設定している
ため、録音のはじめの部分には「これか
ら録音がはじまる」という内容の話題が
多く、自然な話し始めの例はやはり少な
い。従って、本調査では④の分類は11例
のみしか用例がなかったが、これらの例
は内省でも助詞を入れることはできず、
ハダカの自称詞のみが有する機能である
と考えられる。また、③も内省でも助詞
を入れることはできない。

談話の場合には「わたしは」、「わたしが」
で話をはじめるのはやや不自然である。
「わたしは」が不自然になるのは前から続
いている話題の受け継ぎの機能があるた
めではないかと考えられる。「わたしが」
については、「わたしが」で話をはじめる
と唐突に感じられてしまうからであると
考えられる。談話において「わたしが」が
使われると、排他的な意味が含意されて
しまうということも関係しているだろう。

話を始める場合には、「話を始める」こ
とを示す表現が必要であり、ハダカの自
称詞は「話を始める」きっかけの表現と
しても使えるが、「自称詞+助詞」は「話
を始める」表現にはならない。このよう
にハダカの自称詞は談話展開のために使
われることがあるのである。

5. 分類についての考察

分類①②の用例は、長谷川(1993)、黒
崎(2003)で主に論じられている「が」や
「は」がある用例との比較の考察とも関
連がある。長谷川(1993)によると、「無
助詞」の機能として「やわらげ」を挙げて
おり、対比や排他的意味を表さないため

に「無助詞」を選択する。長谷川(1993)の「やわらげ」は有助詞との比較からみた「無助詞」の機能である。

黒崎(2003)では、話し手自身が主題であり、主題に対比や強調の意味を全く付加しない場合、一人称詞は顕在化させる必要がないが、敢えて顕在化させる場合、「ハ」が付加したときに生じる対比感を回避するために、無助詞が選択されると述べられている。黒崎(2003)でもなぜあえて一人称詞を顕在化させるのかについては述べられておらず、有助詞との比較からの分析となっている。

しかし、本稿で見てきた通り、談話においては対比や強調の意味を付加しない場合でも一人称詞を顕在化させることがある。もし「対比」や「排他」の意味を回避したいだけであれば、言わなくてもわかる主体を示す必要はない。

本稿では、有助詞との比較からの考察だけではなく、ハダカの自称詞を使わない場合との比較からも考察を行い、ハダカの自称詞をあえて顕在化させるのは、「対比」や「排他」の意味の回避のためだけではなく、話し手の発話態度を示すために用いられていることを示した。

分類③「話題転換」や④「話し始め」の機能がハダカの自称詞のみが有する領域である、ということは黒崎(2003)の新しい話題の新規導入文は「無助詞文」であるという指摘とつながる。本稿の指摘が黒崎(2003)の指摘と異なる点は、黒崎(2003)で扱っているのは名詞全般であるのに対し、本稿で扱っているのは「言わなくてもわかるときに言う」ハダカの自称詞であり、単に新規の話題を導入するためだけに用いられているのではな

く、話題をはじめるきっかけの言葉として「なんか」や「ていうか」などのように用いられていることを述べている点である。発話内容が定まっていない場合には、フィラーのように「間をつなぐ」ために使われている用例もある。

本稿では、談話展開のためにハダカの自称詞が用いられていることを示した。

6. おわりに

半沢(2003)では、複数の言語主体が言葉のまとまりをつくるということを談話の定義として述べている。「発話内容を聞き手に訴えかけたり、自分の意思を個人的な意思として聞き手へ配慮を示したりする」という「話し手の発話態度」をハダカの自称詞で示すのは、話し手と聞き手が同じ場において言葉のまとまりをつくる談話だからこそのことである。

また、「ある時点から話を始めたり、相手と話している中で話題を転換したり間をつないだりする」ときにハダカの自称詞を用いるのは「談話」を「展開」させるためであり、それは交替を前提とした発話からなる談話だからこその必要となることである。どの助詞をいれることもできないハダカの自称詞が文章に見られず談話のみに見られるのは、いわゆる「無助詞」現象が複数の言語主体が言葉のまとまりをつくるという談話の特徴と結びついているからである。

言わなくてもわかるときに「わたし」と言うのは、主体の明示のためだけではなく、そのような「わたし」が談話標識としても用いられているからである。つまり「言わなくても」主体が「わかる」からといって、ハダカの自称詞がなくても良

いわけではないのである。

注

- 1) 本稿では助詞がない部分はΦを用いて示す。紙幅の都合で発話毎には改行しなかった。発話の前の< >内の場面説明、Φ記号、用例中の下線、□記号はすべて筆者によるものである。
- 2) 浅津 (2008) では、一人称無助詞文の発話目的として「表明・告白」「認識形成」「質問」を挙げているが、いずれも構文的な分析であり、談話レベルでの分析が不十分である。
- 3) 【男性】の調査は行ったが論文中に引用した例がなかった。
- 4) 「自分」は再帰的用法があり、関西方言では対称詞としても使うことが多い。「わたし」などの自称詞と異なる用法があり、同列に扱うことはできないため、用例として採集しなかった。
- 5) 発話の定義は【女性】の「(1) 意味のまとまりがある (2) ポーズがある (3) 他者のさえぎりが無い」に拠っている。
- 6) 前掲の例 [2] は分類③の例である。
- 7) 自称詞に助詞がつく用例にも前に「間」のある用例はあったが、一旦「間」をおいだけで、話題は継続していた。

参考文献

- 浅津嘉之 (2007) 「主体一人称と無助詞」『日本語教育論集』16 姫路獨協大学大学院
- (2008) 「「私」と無助詞の関係」『日本語教育論集』17 姫路獨協大学大学院
- (2012) 「「私は」と「私Φ」による発話解釈への影響」『日本語教育論集』21 姫路獨協大学大学院

大隅紀子 (2005) 「一人称名詞句後に現われる無助詞—丁寧度の異なる会話での使用から—」『言語と文明』3 麗澤大学大学院言語教育研究科論集

尾上圭介 (1996) 「主語にハもガも使えない文について」日本認知科学会第13回大会ワークショップ資料

甲斐ますみ (2000) 「談話における1・2人称主語の言語化・非言語化」『言語研究』117

楠本徹也 (2010) 「日本語の対話テキストにおける自称詞・対称詞の主題機能—中国人学習者の日本語による初対面会話からの分析」『東京外国語大学論集』81

黒崎佐仁子 (2003) 「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』2

鈴木孝夫 (1982) 「自称詞と対称詞の比較」國廣哲彌 (編) 『日英語比較講座 第5巻 文化と社会』大修館書店

中島悦子 (2011) 『自然談話の文法—疑問表現・応答詞・あいづち・フィラー・無助詞—』おうふう

長谷川ユリ (1993) 「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80

半沢幹一 (2003) 「文章・談話の定義と分類」佐久間まゆみ (編) 『朝倉日本語講座7 文章・談話』朝倉書店

付記

本稿は2012年7月21日に行われた第122回表現学会東京例会での口頭発表の一部に大幅に加筆修正を加えたものです。例会での発表、また論文の審査において貴重なお意見を賜りましたことを感謝申し上げます。

(早稲田大学大学院教育学研究科研究生)